「新しい歴史教科書をつくる会」のExit, Voice, Loyalty
——東アジア国際関係への含意を中心に——

具　裕珍

I. はじめに

「新しい歴史教科書をつくる会」とは

「新しい歴史教科書をつくる会（以下、つくる会）」の歴史教科書をめぐる2001年と2005年、東アジアでの夏は著しく暑かった。「つくる会」がつくった自国中心的な歴史認識を盛り込んだ歴史教科書が「文部科学省（文科省）」の検定を通過、各地の学校現場での「採択戦」[1]が行われたからである。このすべての過程で、東アジア国々の激しい非難が日本の国内へ浴びせられたのも周知のことである。

冷戦後に深化したグローバル化のなか、東アジアにおける日本の役割はかつてないほど期待された。しかし、「つくる会」の歴史教科書の文科省検定の通過や学校現場での採択という事実は、日本と東アジア諸国との関係に悪影響を与えるのに十分であった。特に韓国と中国政府は批判声明を発表したり、予定された外交会合をも取り消したりする強硬な態度で反応し、東南アジア諸国も日本の歴史問題の扱いに遺憾を表明すると共に、東アジア協力に核心的な東北アジアの関係がギクシャクすることへの懸念を隠せなかった。

「つくる会」は1996年12月2日、同年6月文部省の検定結果の発表後明らかになった、中学校歴史教科書に記された「従軍慰安婦の強制連行」の記述が導火線になって[2]、「21世紀に生きる日本の子どもたちのために、新しい歴史教科書をつくり、歴史教育を根本的に立て直すこと」[3]を目指して結成記者会見を開き、翌年1月30日、結成総会をもって正式に発足した。彼らの日本社会への呼びかけは1990年代の冷戦終焉、湾岸戦争、村山談話などを背景として、従来と異なる保守系運動として注目を集めた(小熊[1998])。創設当時「つくる会」の呼びかけ人とそれに参加した人々には、学界・言論界から多彩な顔ぶれが揃っていた。ドイツ文学者であった西尾幹二、現在日本の歴史教育が「自虐史観」として「イデオロギーにとられない自由な立場からの大胆な歴史の見直し」(吉田[1997: 74])を唱えた当時東大教授藤岡信勝、示唆的な内容で人気を得た漫画家小林よしのりなどがその代表に挙げられるだろう。結成直後から日本社会各界各層への支援を要請しながら、彼らは日本社会内で彼らのネットワークを拡大しつつ[4]、「歴史問題」が日本社会内でもうタブー視されないよう、全方位活動を広げていた。歴史学者も含まれず、あまりにも多様な背景を持つ人々が集合したため、ついに教科書をつくり、学校現場で採択されるに至ったのは、「つくる会」の結集および活動を見下した人や関係者らにとってショックともいえる出来事であった。

このように「つくる会」と彼らの歴史教科書は日本国内のみならず、東アジア国際関係にまでその影響を広げ、地域の問題群として位置づけられてきた。しかし、その反面、2005年以降少しずつ浮かび上がった彼らの内紛と分裂に至る組織上の問題はどのように説明できるか。確かに「つくる会」は日本社会でかつてない歴史議論を導いて、日本国内外に多大な懸念を与え

ているが、この「つくる会」という組織は、はたして日本国内で「歴史問題」という争点を率い、教科書の採択運動に邁進できる単一な行為体であろうか。言い換えれば、日本のいわゆる「右傾化」を恐れる外部の見解のように、多彩な背景、利害を乗り越えて一枚岩になって強力な波及力を持ち続けるのか。あまりにも多様な背景を持っている人たちが参加している「つくる会」であるため、組織内(intra-group sphere)にはどのようなダイナミックスがあるのか。なぜ「つくる会」の内部にはこのようなダイナミックが観察されるのか、そしてこの特徴は何だろうか。本稿ではこのような問いに答えようとする。

「つくる会」に関する既存研究と本稿のアプローチ

「つくる会」に関する既存研究は、2001年「つくる会」の教科書が文科省の検定を通過し、学校現場で「採択戦」に入ってから、「つくる会」への関心が高まって、様々な関連分野で膨張してきた。大別すると、「つくる会」の歴史認識をめぐって進められた研究、つまり、彼らの歴史認識の分析と批判、ナショナリズムの観点からの研究(小熊[2003], 韓[2000][2006])と、社会運動として分析された研究、つまり、保守社会運動として(鄭[2001], 上野[2003])あるいは特殊な目的をもつ政治組織として(Richter[2003], 李[2006], 俵[2001][2005])の研究などがある。ところが、先行研究は「つくる会」がもたらした主題に対する関心がほとんどで、「つくる会」を過大評価もしくは過小評価している。すなわち、政治組織として取り扱われた数少ない研究を除くと、「つくる会」という組織自体に関する「実証的研究(empirical study)」はほぼ行われていないため、本稿が投げかけた問いに適切な答えを提供していない。

本稿では、論議を進めるにあたり、研究対象を次のように限定する。前述したように「つくる会」に関する先行研究は様々な主題が混在しているので、本稿では研究対象として「つくる会」の中央レベル、つまり、理事会に焦点を絞ることにする。確かに、「つくる会」は社会運動も組み合わせて全方位的活動を展開する団体で、とりわけ自らの教科書を採択させるためには、地方組織の役割も非常に重要であることも事実である(5)。しかし、本稿では団体全体の行方を左右する方針や団体イメージは中央レベルの理事会で決められるとみなし、理事会を検討することとする。

なお、本稿では「つくる会」の理事会内で何が起こっているのか、そのダイナミックスを、三つの時期に分けて観察する。時期の区分は教科書採択戦が行われた2001年と2005年を基準として分けた。これは、教科書採択戦後、悲惨な結果を受け、内部に密かに潜在していた葛藤が水面上に浮上して増幅し、それによって激しい内紛が起こったり、極端な脱会が相次いだりしたからである。

「つくる会」が強力な一枚岩の組織か否か、どのようなダイナミックスが実際起こっていたかを浮き彫りにするため、本稿ではハーシュマン[1970]の「離脱exit」、「発言voice」、「忠誠loyalty」の枠組みを用いることにする(6)。ハーシュマンはある企業の「とりかえしのつく過失(repairable lapses)」が、その企業の製品をもう購入しない消費者の「離脱」と、製品の改善を要求する「発言」によって回復できるという「回復のメカニズム」を主張した。そのうえで彼は、消費者らの「離脱」をためらわせること、あるいは「発言」を促すことは、その企業への「忠誠」であるとつけ加える。こうしたハーシュマンの枠組みは実際、企業だけではなく、様々な組織から、政党まで適用され、幅広い分析力や影響力をもつようになった。

ハーシュマンの枠組みを「つくる会」の内紛

と分裂の過程に適用すると、様々な背景をもって集まった「つくる会」の理事会メンバーは、「つくる会」の発足以来、2001年と2005年の採択戦で、悲惨な結果をめぐって①「脱会（離脱(Exit)）」と②「激しい批判・議論（発言(Voice)）」、③「沈黙（忠誠(Loyalty)）」という反応が生じると考えられる。これに加えてさらに、④「発言後離脱(Voice→Exit)」と⑤「脱会後沈黙（離脱後忠誠(Exit→Voice)）」[7]という選択肢が活用されると想定できる。

「つくる会」の理事会メンバーにとって、「採択戦」とその結果は組織の現状を自覚することができる分水嶺である。だが「つくる会」は、攻撃的活動を通して「歴史問題」という議論の主導権を握り、その影響力を広げてきたにもかかわらず、2001年度と2005年度の教科書採択戦で惨敗した。二度とも目標値であった10%どころか、歴史教科書の場合、2001年度は0.039%（全体需要1,320,197冊のなか、521冊）、2005年度には0.4%（全体需要1,247,653冊のなか、4,912冊）に留まったのである[8]。2001年と2005年、「つくる会」の理事会メンバーは初めて組織の危機（衰退）を目の当たりにし、上で提示した五つの決断を下すことになる。

惨敗をうけ、「つくる会」の理事会メンバーは第一に、脱会という選択肢を用いた。しかし、ハーシュマンが主な分析対象とする消費者らの即刻の離脱とは異なり、「つくる会」の場合、惨敗のため直ちに脱会した場合より、激しい発言ののち、脱会する傾向が多かった。第二に、惨敗をうけ、理事会の個々のメンバーは次回の必勝のため、指導部を激しく批判したり、改革を求めたりする「議論」の場での「発言」を行使した。第三に、その全過程を通して「沈黙」しているメンバーも意外に多く存在していた。ハーシュマンの枠組みのなかで、一番曖昧なカテゴリーであった「忠誠」の選択肢は、保守右翼という理念に基づいている「つくる会」のような団体では重要な選択肢として働いていることがわかったのである。第四に、組織の改善のため、激しい議論が行われたが、そのあと、妥協や意見の収斂が結局行われず、「発言後脱会」する選択肢を行使するメンバーも見られた。最後に、なんらかの理由で脱会したあと、「つくる会」に向けて一切の発言もなく沈黙する選択肢、あるいは、脱会してしばらくの間は「つくる会」に向け、若干の発言をしていたが、そののち、「つくる会」への発言をやめ、自分らの道を歩む形で沈黙する、いわば「脱会後沈黙」という選択肢が用いられた。この選択肢は非常に興味深いものである。すなわち、脱会した組織に向けて激しい発言が少ないのは、「現在の教科書はおかしい」という考えを前提として集まった彼らの特性、つまり、総論は賛成するが各論ではバラつきがあるという「忠誠」の傾向が強く現れるものだと考えられる。表 I-1は今まで論じた五つの選択肢を整理したものである。

ハーシュマンのフレームワークを「つくる会」に適用することには、次のような意義がある。

表I-1.「つくる会」の理事会の構成員の選択肢

選択肢	説明	主な特徴
Exit	脱会	数少ない。
Voice	激しい批判や議論など	何より優先的に活用される。
Loyalty	沈黙	目立って多い。
Voice→Exit	激しい議論のち、脱会	2005年以降主に取られる。
Exit → Loyalty	いろいろな理由で脱会のち結局沈黙	全過程にわたって取られる。

保守右翼団体に関するまれな実証研究のなか、このような分析の試みを通して、まず、今までの先入観に基づいて感情的な攻防が交じり合った議論からの脱却が可能になり、異なるスタートラインからの議論が進められ、従来と異なる「つくる会」独自の特徴が見つけられる。さらに、このような試みは特殊的であるとみなされた保守右翼団体を比較可能な分析対象、例えば利益団体などのカテゴリーに入れ、学問的に分析できるようにしてくれる。最終的に、日本の右傾化を恐れる側により客観的かつ実証的な観点を与えることが期待できる。

以下では、分けられた時期に、「つくる会」の理事会メンバーが、五つの選択肢をどのように活用したかを描きながら、「つくる会」内部のダイナミックスを検討していく。これによって「つくる会」は、彼らの運動を最大化できる一枚岩の組織ではなく、様々な利害を持って、その利害の最大化を図る個人やグループが集まった組織であることが明らかになる。

II.「つくる会」内部のダイナミックス：内紛と分裂の過程

結成直後から活発な運動を展開してきた「つくる会」は、多様なバックグラウンドをもつ人々が「今の教科書はおかしいという一点が、われわれの共通項」であるとして集まったものである[9]。あまりにも多様なバックグラウンドをもつ人々が集まったので、「つくる会」が教科書の作成までに内部分裂を起こさなかったこと自体が稀有なこととみなされるほどであった(小熊・上野[2003:4-5])。

II.1 結成から2001年の採択戦まで：組織上昇期の「忠誠」

結成から2001年の採択戦までは、上に記したように、「つくる会」はたとえ多様な背景をもっている人々が集まったとしても、単一の行為者のような猛烈な活動を広げてきた。この時期は「つくる会」にとって、明確な目標があり、組織を拡大しようとする理事会の拡大が目立つ。そのため、運動上に起こるはずの若干の内紛が観察されても、これは「つくる会」に打撃を与えるほどではなかった。

(1) 理事会の「離脱」・「発言」・「忠誠」：「忠誠」選択肢の主な活用

この時期は組織結成の初期にあたるため、正確には分析対象時期に核当していない。ハーシュマンの枠組みは、衰退する組織への反応を示しているからである。しかし、表II-1で確認できるように、理事会のメンバーの構成に変化が起こっていることがわかる。そこで、本稿の枠組みを適用してみると、この時期には副会長と事務局長の脱会（離脱）があったものの、「忠誠」と「脱会後沈黙」が主であった。この時期の「つくる会」は、若干の問題が起こっても組織が上昇中ならば、組織に向けられる「忠誠」が大部分であることが確認できる。しかし、注目すべきなのは、この時期において、自分にとって無念な気持ちで脱会したとしても、「沈黙」の選択肢を取る誘因があることである。

(2) 理事会の変化とその経緯

表II-1は、「つくる会」結成後からはじめの採択戦までにわたる理事会の主な変化を示している。この時期には基本的には理事会が拡大されながら、副会長をめぐる変化が目立つ。

「つくる会」は、1996年12月2日、結成を表明し、1997年1月30日に設立総会を開いた。その設立総会では、西尾が会長、藤岡が副会長として選出された。1997年4月、「つくる会」は最初のシンポジウムを開催、6月に「史」という会報を創刊するなど、本格的な活動を開始した。そしてついに1998年、「つくる会」は教科書製作に突入することになった[10]。

表II-1. 理事会の変化(1997年から2000年9月まで)

肩書き	1997年1月		1998年2月		2000年9月	
	職業	氏名	職業	氏名	職業	氏名
会長	電気通信大学教授	西尾幹二	電気通信大学教授	西尾幹二	電気通信大学教授	西尾幹二
副会長	東京大学教授	藤岡信勝	東京大学教授	藤岡信勝	明星大学教授	高橋史朗
	—	—	新松下村塾塾長	濤川栄太	—	—
理事	学習院大学教授	坂本多加雄	学習院大学教授	坂本多加雄	学習院大学教授	坂本多加雄
	明星大学教授	高橋史朗	明星大学教授	高橋史朗	東京大学名誉教授	伊藤隆
	国立歴史民俗博物館助教授	大月隆寛	國学院大学講師	高森明勅	國学院大学講師	高森明勅
	秀明大学教授	西部邁	秀明大学教授	西部邁	秀明大学教授	西部邁
	東京大学名誉教授	伊藤隆	東京大学名誉教授	伊藤隆	東北大学大学院教授	田中英道
	弁護士	中島修三	弁護士	中島修三	弁護士	中島修三
	東京大学名誉教授	芳賀徹	東京大学名誉教授	芳賀徹	東京大学名誉教授	芳賀徹
	—	—	—	—	元BMW東京(株)社長	種子島経
	—	—	—	—	杏林大学教授	田久保忠衛
	—	—	—	—	東京大学教授	藤岡信勝
理事待遇	—	—	—	—	漫画家	小林よりのり
事務局長	専任	草野隆光	国立歴史民俗博物館助教授	大月隆寛	國学院大学講師	高森明勅

※ 資料出所: 1997年は韓相一、2006、「日本型のシステムとグローバル化：ナショナリズムの抵抗と適応—グローバル化と『新しい歴史教科書をつくる会』」、〈国民大学校日本学研究所学振二期ワークショップ〉発表論文、6月27日、(江原道襄陽)より; 1998年は「俵の解説(歴史修正主義者の動向)」http://www.linkclub.or.jp/~teppei-y/tawara%20HP/kaisetu.html#★「自由主義史観」研究会関係(検索日：2006年7月5日); 2000年の理事会名簿は俵義文、2000、『あぶない教科書』、学習の友社、pp.11-12より

「つくる会」の運動が1998年夏、小林の『戦争論』と1999年『国民の歴史』の発刊により、日本社会での関心を集めている頃、副会長であった藤岡と濤川の間で葛藤が生じ、結局、藤岡は理事になり、濤川は脱会することになった。これは、1999年7月29日の理事会で決定された事項で、「つくる会」は公式的に「今回の措置は、会の運営をより健全化し、運動を一層発展させるため」であると説明していた。しかし、俵([2006:234]、以下は俵の説明)によると、この真相は、濤川の影響力の拡大に対し、藤岡の牽制がもたらした主導権の争いだった。すなわち、教科書の採択戦のため、「つくる会」は都道府県支部づくりに取り組んでいたが、それを濤川が主導することを快く思わない藤岡が、濤川の女性問題などを理由に攻撃し、二人は公然とお互いを誹謗・中傷しあい、会の運営が「不健全」になって支障をきたすまでになったのである(俵[2006:234])。この時は、理事でもない小林が二人の解任と新副会長人事を理事に根回

しし、理事会にも出席して、「理事待遇」に就任することになったのである。新たに副会長になった高橋は右翼活動家として、「日本会議」のメンバーでもあり、運動上に積極的なネットワークを形成し、活発に働いた[11]。

この事件で副会長の二人の選択が異なったことも、興味深いところである。藤岡は、湾岸戦争の衝撃から(藤岡[1996b:2-3])1994年4月『社会科教育』誌に「近現代史授業改革」に関する論文を連載しはじめ、戦後日本の歴史教育が「東京裁判史観」、「コミンテルン史観」、また「大東亜戦争肯定史観」に基づいていたと述べた。彼は既存史観を乗り越える「第三の道」として(藤岡[1996a:2])「自由主義史観」を探る研究会」をつくり、会長として活躍してきた。この会は「つくる会」の前身とも言われる組織で、「つくる会」への藤岡の愛着がうかがえる。反面、創立後、合流し、上昇中の組織で活発な活動を果たしたのが濤川であった。組織に対するこうした異なる背景や態度は、理事としても組織に残る「忠誠」選択をした藤岡と脱会を選択した濤川の重要な背景になったのだろう。

一方、この他に、この時期には相次いで事務局長が脱会した。いずれの場合も解任で追い出される形の脱会だったが、彼らが取った主な選択肢は「離脱後沈黙」であった。大月は2000年2月、『あたしの民主主義』という本を出した際、脱会した理由を書いたにもかかわらず、「この本が暴露本にはなりたくない」と明らかにしたのである(大月[2000:10])。

結成から2001年の採択戦まで、「つくる会」は多様な背景をもっている人々が集まっているにもかかわらず、単一の行為体のように積極的な活動をとり広げてきた。この時期、若干の理事会の変化は、「つくる会」のなかで潜在していた路線上の葛藤が具体化されたものではなく、組織上の主導権争いが主な原因であるため、上で述べたように「沈黙(Loyalty)」という選択肢が主に使われた。国民から支持を得つつ、運動の目標が明確だったため、「つくる会」に損になるほどの大きな抵抗や内紛はなかったといえる。

II.2. 2001年の採択戦から2005年の採択戦まで：「反米」対立軸の浮上と本格的な内紛

「つくる会」の教科書のパイロット版と呼ばれる『国民の歴史』がベストセラーになり、実際、「つくる会」の教科書が2000年4月、文科省検定に申請されてから、「つくる会」と「つくる会」の教科書は日本国内外で論難の中心になった。日本国内では1998年6月には「子どもと教科書全国ネット21」[12]が結成され、「つくる会」と「つくる会」の教科書に反対する様々な活動を展開し、日本と過去の不幸な歴史を共有している近隣諸国は、検定申請中である「つくる会」の歴史教科書に対しての憂慮を日本政府に伝え始めた。このような雰囲気のなかで、日本の文科省は2001年3月、早めに検定結果を発表し、「つくる会」の教科書は検定を通過、各地域で採択を迎えるようになった。

しかし、初めての本格的な採択戦に突入した「つくる会」は日本国内外でかつてない強い批判と抵抗に直面し、結局、採択戦の結果として、採択率0.039%という振るわない成績を受けた。こうした採択戦上の惨敗は、「つくる会」の幹部や賛同者や会員など、「つくる会」を支えてきたすべての人々にとって衝撃的であるはずだった。そして、この惨敗の衝撃は、以降水面下に沈んでいた「つくる会」の葛藤の要素を浮かび上がらせる触媒として作用した。

(1) 理事会の「離脱」・「発言」・「忠誠」：「発言」選択肢の主な活用

万全の態勢で迎えた初採択戦で苦い敗北を喫した後、潜在してきた葛藤が表面化し、内紛と共に脱会が続いたことは、「つくる会」を観察

する際、肝要である。つまり、この時期はハーシュマンの枠組みが想定する組織の危機下で、「つくる会」のメンバーがどのような選択をとり、これによってどのような組織内部のダイナミックスが生じたかが観察可能であるからである。

組織の危機に直面し、理事会の構成員らは五つの選択肢をうまく活用するようになった。そのなかで、もっとも著しく活用されたのは「発言」であった。しかし、ハーシュマンが「忠誠」は「発言」を活発化する(Hirschman[1970: 77])と指摘したように、この「発言」は「忠誠」から生まれた「発言」であった。「忠誠」によって「つくる会」の理事会メンバーは、組織の改善を求める「発言」を生かし、その結果、指導部が責任を取る形で一部変わった。しかし、それは、会長だった西尾が「つくる会」の発足から象徴的な存在であったため、決して簡単なことではなかった。西尾会長を名誉会長として異動させたのは、メンバーの「発言」がいかに深刻であったかを反映している。さらに、2005年の採択戦に向けて、「つくる会」としては大胆な決定である若手八木の会長推薦も強力な「発言」によるものである。

「発言」と共にこの時期目に付く選択肢は、「発言後脱会(Voice→Exit)」である。それをより一層特徴づけるのは、ある「軸」をめぐって行われた動きである。結成初期「反米」という軸を潜在的に持っていた「つくる会」は、政府に近づくにつれて、「反米」という軸への修正、さらに放棄するようになった。この動きに対して西部と小林は激しい批判や議論の「発言」をして「脱会」を避けようとしたものの、結局、指導部と鋭く対立し、脱会することになった。脱会した彼らも「つくる会」にとって象徴的な存在であって、特に小林は日本の若者に対する影響力が絶大であったにもかかわらず、辛い決断を下すしかなかった。

なお、さらに興味深いところは、脱会した彼らの「つくる会」への沈黙である(Exit→Loyalty)。相当激しい議論があったものの、彼らは脱会して「つくる会」への批判や発言を長く続けなかった。彼らは自らの考えを盛り込んだ雑誌や本を出版したりして、自らの信念を踏まえた活動を行ったのである。この選択肢は2001年採択戦の前に起こった「脱会後沈黙」とも少し性格が異なるものである。つまり、2001年は採択戦の惨敗をうけ、衰退する組織に対して何らかの形で発言をして、結局発言が通らなかった後、脱会したわけであるから、「脱会後発言(Exit→Voice)」という選択を下す誘因があるにもかかわらず(Kato[1998:859])、その選択肢を排除したというのは、やはり、保守右翼性を持つ彼らの団体の特性を見出すという解釈が可能だと考えられる。

この時期、「つくる会」の危機に直面して理事会メンバーがとった選択肢は、主に「忠誠」を基盤とした「発言」と「発言後脱会」、そして「脱会後沈黙」である。この時期は初めての採択戦をめぐって行われた選択で、2005年以降の選択を占うものとなった。

(2) 理事会の変化とその経緯

表Ⅱ-2は、2001年の採択戦の前後の理事会の変化を示している。第一に目立つのは、創設メンバーであり、「つくる会」に決定的な寄与をしてきた二人、西部と小林の脱会に伴う理事会の変化である。第二には、西尾が名誉会長に移り、田中英道が会長に、また若手の八木が会長に就任したことである。後者は採択戦で惨敗したため、執行部の何人かが責任を負う形での辞任とみなすことができるが、前者の場合は「つくる会」に潜在していた路線上の葛藤が表面化したものといえるのである。すなわち、「つくる会」がもっていた「反米」という軸を取り巻く対立が表面化したのである。

21世紀に入ってから世界は想像できなかった同時多発テロという恐ろしい事態を迎えた。2001年9月11日アメリカで起こった同時多発テロ後、アメリカはテロ支援国家アフガニスタンとの戦争に入り込んで、アメリカの同盟国や反テロ支持国家はこの戦争に巻き込まれることに

表II-2. 理事会の変化(2000年から2004年8月まで)

肩書き	2000年9月		2003年		2004年8月	
	職業	氏名	職業	氏名	職業	氏名
名誉会長	—	—	電気通信大学名誉教授	西尾幹二	電気通信大学名誉教授	西尾幹二
会長	電気通信大学教授	西尾幹二	東北大学大学院教授	田中英道	高崎経済大学助教授	八木秀次
副会長	明星大学教授	高橋史朗	明星大学教授	高橋史朗 (13)	拓殖大学客員教授	遠藤浩一
	—	—	元BMW東京(株)社長	種子島経	ノンフィクション作家	工藤美代子
	—	—	東京大学教授	藤岡信勝	演出家	福田逸
	—	—	—	—	拓殖大学教授	藤岡信勝
理事	学習院大学教授	坂本多加雄	拓殖大学客員教授	遠藤浩一	元BMW東京(株)社長	種子島経
	東京大学名誉教授	伊藤隆	東京大学名誉教授	伊藤隆	東京大学名誉教授	伊藤隆
	國学院大学講師	高森明勅	弁護士	中島修三	弁護士	高池勝彦
	秀明大学教授	西部邁	杏林大学教授	田久保忠衛	杏林大学客員教授	田久保忠衛
	東北大学大学院教授	田中英道	浦和短期大学名譽教授	九里幾久雄	浦和大学名譽教授	九里幾久雄
	弁護士	中島修三	京都大学教授	中西輝政	京都大学教授	中西輝政
	東京大学名誉教授	芳賀徹	皇学館大学教授	新田均	皇学館大学教授	新田均
	元BMW東京(株)社長	種子島経	東京大学名誉教授	芳賀徹	大正大学教授	福地惇
	杏林大学教授	田久保忠衛	國学院大学講師	高森明勅	皇學館大学助教授	松浦光修
	東京大学教授	藤岡信勝	高崎経済大学助教授	八木秀次	神戸大学助教授	吉永潤
理事待遇	漫画家	小林よしのり	—	—	—	—
顧問	—	—	—	—	東京大学名誉教授	芳賀徹
事務局長	國学院大学講師	高森明勅	専任	宮崎正治	専任	宮崎正治

※ 資料出所: 2000年の理事会名簿は俵義文、2000、『あぶない教科書』、学習の友社、p.11-12より; 2003年の理事会名簿は藤岡信勝編、2003、『新しい歴史教科書を「つくる会」が問う日本のビジョン』、扶桑社、p.316-317より; 2005年10月13日の理事会名簿は「「つくる会」ホームページ理事会」http://www.tsukurukai.com/02_about_us/06_supp_01.html(検索日: 2005年11月24日)より

なった。

このさなか、2002年2月7日、「つくる会」は「『戦争論2』と9.11テロ：日本はアメリカの保護国か」というタイトルでシンポジウムを催した。小林はすでに『戦争論2』で「今回のテロそのものがアメリカのグローバリゼーションによって招来された」などと、米国を激しく非難し始め、このシンポジウムの基調講演でも、アメリカのアフガニスタンとの戦争について、アフガニスタンで「無辜の民が死んでいる」とアメリカへの批判を止めなかった(14)。小林はさらに、日米同盟への批判も加えた。これに対して、八木・田久保・西尾などが、「思想と政治は別。思想は反米だとしても、現実の政治では反米は選択肢ではない」、「思想と政治は分けて考えるべきだ」などと小林を批判し、会場からも小林への野次が激しくなった(小林[2002:99])。これをきっかけにして、小林、西部と西尾、八木、藤岡などの理事が対立して、小林と西部が「つくる会」を退会することになった。

小林は「つくる会」に参加する以前から、官僚主義の批判などを描いた漫画などで人気を集めていた。こうした彼が「つくる会」の結成の呼びかけ人になったことで、「つくる会」にも非常に関心が集まっていたことも事実である。そして、彼が1998年に出した『戦争論』は大きな反響を呼び起こし、「『小林よしのり』というメディア」効果はきわめて大きかった(中西[1998:106])。しかし、「反米」という軸の浮上とこれを取り巻く対立の結果、彼は脱会の決断を下した。以下は小林自らが出した決断の内容である。少し長いが、引用することにする。

> …『諸君!』三月号で西尾氏はこんなことまで言っている。
> 「『ゴーマニズム宣言』のほうはテロ以降、いささか混乱しているのではないですか。タリバンの原理主義に対抗して日本にも原理主義があることを強調するようになってきています。でも、この日本の原理主義とやらをアメリカに対抗する感情として並列しようとすると宗教的文化的にやはり無理です」
>
> この原理主義というのが何のことかと思ったら、なんとわしが「伊勢神宮」について描いたことを指しているのである。わしは伊勢神宮を日本の「原理主義」などと紹介した覚えはない。そもそも西尾氏の中で「原理」と「原理主義」の区別もついていないのだが、西尾氏よ、「歴史」を見直す運動自体が民族のアイデンティティーを見直すことであり、それはまず民族の「原理」があるとして考えない限り、決して語れないものではないか。
>
> 「原理」がなければ、日本人であろうとなかろうとかまわない。中国人にでもなればいい。「原理」をあると仮定しないで、なぜあなたは日本人の歴史やアイデンティティーを語ろうとしてきたのか。
>
> わしは原理主義を描く気はないが、原理（アイデンティティー）は追求する。伊勢神宮を描いただけで「原理主義」などと批判しだす左翼並みの乱暴な人間とは決別したい。かくして「つくる会」を脱会した。(小林[2002:105])

この事件は、「反米右派対親米右派との対立で、反米右派が『つくる会』と決別した」ということを生き生きと示している(俵[2006:235])。「つくる会」内部で、「反米」という軸は「つくる会」の設立初期から絶え間なく提起された問題であった。藤岡が唱えた「自由主義史観」も、米国の利益を基盤にしている「東京裁判史観」が既存の歴史教科書に反映されていることを批判し、「反米」の側面を示した。このような「反米」という軸のため、「つくる会」が日本の政治社会上に大きな影響力を発揮できないとい

う分析が、これまでの「つくる会」の性格を取り扱う大部分の文書が指摘したことであった(吉田[1997:79-80], 韓[2000:412-414], 小熊[1998])。しかし、小林と西部が2001年扶桑社版の教科書にもある程度反映された「反米主義」を、現在の日米関係にまで適用しようとした時には、日米安保体制を維持しようとする「つくる会」の主流との摩擦が不可避になって、結局、小林と西部の脱退につながったのである。小林が批判しているように、西尾、田久保、八木は「『政治』しか語らなくなって」、「つくる会」はもう「思想に基づく社会運動」ではなくなったのである(小林[2002:99])。

思想的な「反米」グループであった小林と西部の脱会は2001年以降、「草の根」市民運動からも離れて、「つくる会」が日本政府とより密着する主な要因になった。言いかえれば、保守化に従って誕生した小泉政権に、「つくる会」の運動と教科書は、政権が願う愛国心や憲法改正を求める雰囲気を造成したのである。「反米」という軸が消えてしまった「つくる会」に、政権は採択戦で有利な制度的あるいは政治的な後援を与えることになったのである[15]。

以降、「つくる会」は2005年の採択戦に備え、組織を整備しはじめた。彼らは①「つくる会」の教科書の改善、②採択校での高い評価、③採択システムの適正化、④扶桑社の営業体制の強化、⑤国内外の情勢の変化をあげて2005年の採択戦においては、以前と同じ水準である10%獲得が可能であると主張した(俵[2005a:30-31])。彼らがこのような成果を目指すために引き出したカードが八木秀次である。2004年8月、田中会長が一身上の都合で退任し、しばらく会長職が空席になっていた折、西尾を中心に八木を会長に薦立する動きがあり、結局、八木が引き受けたのである(八木[2006:26])。このとき、西尾も、若い八木が会長になるということは「つくる会」に未来があるということだと語ったし、多くの人々が八木を通して「つくる会」のイメージが改まることを望んだ。そして、八木会長の下、二回目の採択戦を迎えたのである。

II.3. 2005年の採択戦以後：多様なグループの葛藤の先鋭さと分裂

2005年も「つくる会」の教科書が無難に文科省の検定を通過して、2001年に行った日本全国の採択戦[16]と日本国外からの非難や動きもそのままに再現された。以前と比べて、異なったことがあるとすると、「つくる会」の教科書の採択に有利な環境が造成されてきた点だった。それにもかかわらず、今度も「つくる会」は採択率0.4%に留まって、もう一度「一パーセントにも満たなく、限りなくゼロに近い採択率」で惨敗の苦杯をなめた(藤岡[2005:222])。

こうした結果は2004年、第七回総会で八木会長が「来年度の教科書採択は（扶桑社の）『新しい歴史教科書』のリニューアル版でのぞむ。自信作をひっさげての戦いであり、負けられない戦いになる」と、2005年度教科書採択に向けての決意を述べたほど切迫した状況で臨んだため、その衝撃は前回にも増してより大きなものであった。そしてまた誰かが責任をとらなければならない状況となり、それをめぐって、2001年以後「つくる会」に合流したグループとの内紛と権力闘争による分裂(脱会)が生じ、「つくる会」という組織の存立自体に深刻なダメージを与えることになった。

(1) 理事会の「離脱」・「発言」・「忠誠」：「発言後離脱」の選択肢の主な活用

2001年採択戦で惨敗したあと、運動の路線上の葛藤で内紛が生じ、以降、組織を収拾、改めて採択戦に突入したパターンは2005年の採択戦後においても繰り返した。分裂したことをみるとおそらく、2001年より一層激しくなったことが今回の紛争の特徴であるともいえるだろ

う。2001年に続いて2005年再び惨敗を味わった「つくる会」の理事会メンバーは、衰退する組織に対し、「忠誠」から生じた「発言」の選択肢を重んじていたが、前回とは違って半分ほどが「発言後脱会」という選択を下した。

2005年の惨敗を受け、前回より、極端的な「脱会」が相次いだ原因は、第一に、2001年の失敗を繰り返さないよう、また組織拡大を図る戦略のなか、より様々なグループを引き込むことによって、「つくる会」の凝集性が低下したからである。それにより、低い教科書採択率という失敗を前に誰も責任を取ろうとしないことが見られ、この過程で、初代会長であった西尾が無念な気持ちを保ったまま、脱退することもあった。第二に、前回見えなかった「発言後離脱(Voice→Exit)」という選択肢が活発に活用されたのは、「脱会」して新たな「組織」をつくれる資源を持つグループが存在し、離脱を率いたからである。特に、八木は「つくる会」の重要な協力者である「フジサンケイグループ」との縁があって、彼らの資金力と彼らの系列社である扶桑社という出版社があれば、自らの新しい組織をつくることができると判断したわけである。

ところが、今回も相変わらず「離脱後忠誠(Exit→Loyalty)」という選択肢は構成者間に根強く働いていた。分かれた直後には雑誌、『諸君！』を通して、お互いに激しい非難や発言があったが、八木らの新しい組織「教育基本再生機構」が落ち着くにつれて、沈黙という忠誠の選択に戻ってきた。「離脱」してから、以前所属した「つくる会」への発言(非難など)がなくなったのは、「つくる会」の衰退が加速化せず、むしろ「つくる会」を再整備する時間を稼ぐことができたからである。

確かに「つくる会」にとって二度目の惨敗は、「つくる会」内部の内紛を先鋭化させる要因になった。今まで外部から一枚岩のように見えていた「つくる会」は、実際、その内部の様々な利害を持つ各々のグループや個人が存在して、彼らの五つの選択によって、「つくる会」のダイナミックスを描けることが明らかになった。

(2) 理事会の変化とその経緯

このような採択結果は、表II-3にみられるように、「つくる会」の象徴的な存在である西尾の名誉会長辞退と脱会につながった。そして、約一ヶ月後に開かれた2月27日の理事会で、会長であった八木が解任され、また3月の理事会で副会長に就任することになった。最後に、1月と2月の理事会を比べると、長い期間事務局長であった宮崎が解任されたことも目に付く。

これに加えて、表II-4が示すのは、会長が種子島から新任である小林正に変わっており、種子島と八木の脱会に伴って、多くの理事が一緒に脱会し、最終的に第九回の総会で認められた理事会は、大部分が新任で占められていることも確認できる。

いかにして、このような一連の事態が起こったのか。結局、教科書採択「惨敗」の責任をめぐって、様々なグループと個人の葛藤が重なり分裂につながったのである。今回は大まかにいって、「つくる会」創立メンバー対合流したメンバーの争い、すなわち、西尾・藤岡対八木・宮崎の対立が主に働いた。

2005年8月に入って、次第に採択結果が発表されるに従って、「つくる会」の採択責任者であった藤岡は責任を取ると同時に、なぜ失敗したのかという問題に取り組みながら、教育学者で教科書業界をよく知る自分にあらゆる権限を集中すれば失敗するはずはないと考え、西尾と一緒に自分の意のままに動かせる事務局と組織づくりを画策しはじめた(西岡[2006:173])。それを具体化したのが2005年9月1日の理事会で、その理事会が開かれる前、藤岡は扶桑社の担当者らとの反省会を持ち、以前には一度もなかっ

表II-3. 理事会の変化

	2004年8月		2006年1月16日		2006年4月12日	
	職業	氏名	職業	氏名	職業	氏名
名誉会長	電気通信大学名誉教授	西尾幹二	—	—	—	—
会長	高崎経済大学助教授	八木秀次	高崎経済大学助教授	八木秀次	元BMW東京(株)社長	種子島経
副会長	拓殖大学客員教授	遠藤浩一	拓殖大学客員教授	遠藤浩一	高崎経済大学助教授	八木秀次
	ノンフィクション作家	工藤美代子	ノンフィクション作家	工藤美代子	—	—
	演出家	福田逸	演出家	福田逸	—	—
	拓殖大学教授	藤岡信勝	拓殖大学教授	藤岡信勝	—	—
理事	元BMW東京(株)社長	種子島経	元BMW東京(株)社長	種子島経	拓殖大学客員教授	遠藤浩一
	東京大学名誉教授	伊藤隆	東京大学名誉教授	伊藤隆	東京大学名誉教授	伊藤隆
	弁護士	高池勝彦	弁護士	高池勝彦	弁護士	高池勝彦
	杏林大学客員教授	田久保忠衛	杏林大学客員教授	田久保忠衛	杏林大学客員教授	田久保忠衛
	浦和大学名譽教授	九里幾久雄	浦和大学名譽教授	九里幾久雄	浦和大学名譽教授	九里幾久雄
	京都大学教授	中西輝政	京都大学教授	中西輝政	京都大学教授	中西輝政
	皇学館大学教授	新田均	皇学館大学教授	新田均	皇学館大学教授	新田均
	大正大学教授	福地惇	大正大学教授	福地惇	大正大学教授	福地惇
	皇學館大学助教授	松浦光修	皇學館大学助教授	松浦光修	皇學館大学助教授	松浦光修
	神戸大学助教授	吉永潤	神戸大学助教授	吉永潤	神戸大学助教授	吉永潤
	—	—	服飾評論家	市田ひろみ	服飾評論家	市田ひろみ
	—	—	弁護士	内田智	弁護士	内田智
	—	—	明星大学戦後教育史研究センター専任研究員	勝岡寛次	明星大学戦後教育史研究センター専任研究員	勝岡寛次
	—	—	拓殖大学客員教授	高森明勅	拓殖大学客員教授	高森明勅
	—	—	—	—	演出家	福田逸
	—	—	—	—	ノンフィクション作家	工藤美代子
	—	—	—	—	拓殖大学教授	藤岡信勝
顧問	東京大学名誉教授	芳賀徹	東京大学名誉教授	芳賀徹	東京大学名誉教授	芳賀徹
事務局長	専任	宮崎正治	専任	宮崎正治	—	—

※ 資料出所: 2005年10月13日の理事会名簿は「「つくる会」ホームページ理事会」http://www.tsukurukai.com /02_about_us/06_supp_01.html(検索日: 2005年11月24日)より; 2006年1月16日の理事会名簿は「「つくる会」ホームページ理事会」http://www.tsukurukai.com/02_about_us/06_supp_01.html(検索日: 2006年1月26日)より; 2006年4月12日の理事会の名簿は「「つくる会」ホームページ理事会」http://www.tsukurukai.com/02_about_us/06_supp_01.html(検索日: 2006年4月12日)より

表II-4. 理事陣の変化(2006年4月から2006年6月)

2006年4月12日		肩書き	2006年7月2日		
職業	氏名		氏名	職業	新任
元BMW東京(株) 社長	種子島経	会長	小林正	評論家 元参議院議員	○
高崎経済大学助教授	八木秀次	副会長	高池勝彦	弁護士	
—	—		福地惇	大正大学教授	
—	—		藤岡信勝	拓殖大学教授	
拓殖大学客員教授	遠藤浩一	理事	遠藤浩一	評論家	
東京大学名誉教授	伊藤隆		石井昌浩	拓殖大学客員教授	○
弁護士	高池勝彦		上杉千年	歴史教科書研究家	○
杏林大学客員教授	田久保忠衛		小川義男	狭山ヶ丘高等学校校長	○
浦和大学名譽教授	九里幾久雄		九里幾久雄	浦和大学名譽教授	
京都大学教授	中西輝政		桜井裕子	ジャーナリスト	○
皇学館大学教授	新田均		杉原誠四郎	武蔵野大学教授	○
大正大学教授	福地惇		高森明勅	日本文化総合研究所代表	
皇學館大学助教授	松浦光修		濱野晃吉	コンサルタント会社社長	○
神戸大学助教授	吉永潤		福田逸	明治大学教授	
服飾評論家	市田ひろみ		吉永潤	神戸大学助教授	
弁護士	内田智		—	—	
明星大学戦後教育史研究センター専任研究員	勝岡寛次		—	—	
拓殖大学客員教授	高森明勅		—	—	
演出家	福田逸		—	—	
ノンフィクション作家	工藤美代子		—	—	
拓殖大学教授	藤岡信勝		—	—	
東京大学名誉教授	芳賀徹	顧問	芳賀徹	東京大学名誉教授	
—	—		工藤美代子	ノンフィクション作家	
—	—		田久保忠衛	杏林大学客員教授	
—	—		井尻千男	拓殖大学日本文化研究所所長	
—	—	事務局長	鈴木尚之	専任	○

※ 資料出所: 2006年4月12日の理事会の名簿は「「つくる会」ホームページ理事会」http://www.tsukurukai.com/02_about_us/06_supp_01.html (検索日: 2006年4月12日)より; 2006年7月2日の理事会名簿は「つくる会」第9回総会議案書より

た扶桑社社員の理事会への出席を強く要求した。しかし、出席が断わられたのち、理事会で事務局長であった宮崎を糾弾し、辞任を要求した。これに、宮崎擁護派の理事らが反対し、宮崎も退任に応じなかった。

このような宮崎事務局長の解任をめぐって、2005年10月から2006年1月にわたって、日本会議派の理事（内田智・勝岡寛次・新田均・松浦光修）や八木のグループと西尾・藤岡の間で葛藤が先鋭化した(俵[2006:229])。この過程で、西尾は「周知の通り私は1月16日の理事会で『お前はなぜそこにいる』という意味の重ねての無礼な反乱側の挑発に腹を立て、名誉課長の称号を返上した」といって、脱会の選択をすることになった(西尾[2006:196])。

「つくる会」の創立メンバーであり、象徴的な人物だった西尾が脱会したあと、2月27日に開かれた理事会では投票で宮崎の解任を八対六で可決、さらに八木、藤岡の解任動議が出され、八木は六対五（棄権三）で、藤岡は七対四（棄権三）で、解任が可決された。新会長には種子島経が就任した[17]。同時に種子島は、藤岡を会のルールにはなかった「会長補佐」に就任させたが、種子島と藤岡を当惑させたのは、「つくる会」創立時から唯一の歴史家で中心的な人物だった伊藤隆教授の突然の辞任であった。伊藤は3月9日、種子島に「私が（つくる会の理事として）積極的に参加していた時期にも繰り返し内紛が繰り返されていた、その際必ず藤岡氏がその紛乱の中心の当事者であったこと、それがこの会の発展の阻害要因ともなってきたことを思い出し、私の信頼する八木氏を解任した藤岡氏が会の実質上のリーダーとなるような今日の事態のもとで、最早理事として名を連ねることは、全国の連動を推進されている会員の皆様に対して責任を果たす所以でないことを考慮し、改めて理事を辞任させて頂きたく存じます」という文書で辞意を示した(西岡[2006:175])。「発言後離脱」の選択肢を取って脱会した伊藤は、後に八木が発足させた「日本教育再生機構」に参加する。

一方、3月の理事会で八木は、再び副会長に復帰の形で就任することが決められた。これは八木とフジサンケイグループとの連携を重視した「つくる会」の他の理事らの決定であった。実際に、産経新聞は2006年3月29日づけの記事で八木氏が副会長になった3月28日の理事会の内容を伝えながら、「八木氏会長復帰へ…7月の総会までに会長に復帰すると見られる」と報じた[18]。また日本会議の影響力の強い支部からの抗議が根強かったため、「つくる会」の分裂、解体の危機を回避するための措置であろうとの分析もあった(俵[2006:230-233])。しかし、結局、4月に西尾・藤岡に反対して八木は種子島と一緒に脱会した(八木[2006])[19]。八木の脱会を機として、八木と同様な立場であった理事全員も脱会した。

それ以降、「つくる会」は6月20日の理事会で新任が多数含まれた新たな理事会を構成し、7月に開かれた総会で認められた。新たに選出された理事会の最大の課題は、やはり「つくる会」の組織再建と原点に帰っての運動の推進であった[20]。

2001年に比べ、「つくる会」は「つくる会」の教科書採択に、より有利な環境が造成されたと主張し、採択戦で自信をみせたが、結局、0.4％という、目標値の10％はおろか、再び1％にも満たない結果を受けざるを得なかった。このような理由で、今度の内紛は2001年より一層激しくなり、運動の過程で「つくる会」に参与した宗教団体や「日本会議」や産経新聞などの様々なグループと個人が対立する結果をもたらした。

2005年9月から約一年間続けられた今度の内紛は、4月に八木と種子島が脱会、6月に新たな理事会が発足することで、一段落したようにみ

えた。しかし、6月末、八木を中心として、「つくる会」から脱会した人々が集まり、いわば「新『つくる会』」を発足させようとする動きが展開された[21]。「つくる会」を支援してきたフジサンケイグループも、「新『つくる会』」の方を支持する方針を検討中という報道もあった[22]。八木が脱会という選択をした時、新たな組織を発足させることを念頭において動いたかどうかは不明であるが、脱会後、「つくる会」を一緒に脱会した理事会メンバーが参加することを見れば、八木が新しい他の組織を作ろうとする意図があった可能性は高いといえるのだろう。実際に、彼らはブロックをつくって、「日本教育再生機構設立準備室」と名づけて、表II-5のような発起人をのせた。このなかには、今回の内紛によって「つくる会」から脱会した理事たち（伊藤隆、勝岡寛次、種子島経、中西輝政、新田均、松浦光修）が目立って多い。

表II-5.「八木秀次さんとともに日本の教育再生を考える夕べ」の発起人名簿

肩書き	氏名
代表発起人	伊藤隆(東京大学名誉教授)、鍵山秀三郎(イエローハット相談役)、中西輝政(京都大学教授)、屋山太郎(政治評論家)
発起人	秋山昭八(弁護士)、石井公一郎(元ブリヂストンサイクル社長)、磯前秀二(名城大学教授)、井上雅夫(同志社大学教授)、宇佐美忠信(富士社会教育センター理事長)、潮匡人(評論家)、内田智(弁護士)、加瀬英明(外交評論家)、勝岡寛次(明星大学戦後教育史研究センター)、加藤寛(千葉商科大学学長)、加藤十八(中京女子大学名誉教授)、川上和久(明治学院大学教授)、菅野覚明(東京大学教授)、クライン孝子(ノンフィクション作家)、蔵琢也(進化生物学者)、古賀俊昭(東京都議会議員)、篠沢秀夫(学習院大学名誉教授)、島田洋一(福井県立大学教授)、清水誠一(北海道議会議員)、反町勝夫(東京リーガルマインド社長)、高橋宏(首都大学東京理事長)、髙谷朝子(元宮内庁内掌典)、武原誠郎(イムカ社長)、田下昌明(豊岡中央病院理事長)、種子島経(元東京ＢＭＷ社長)、千葉真一(俳優)、土屋たかゆき(東京都議会議員)、鄭大均(首都大学東京教授)、中條高徳(日本国際青年文化協会会長)、中村粲(獨協大学名誉教授)、中村勝範(平成国際大学名誉学長)、西岡力(東京基督教大学教授)、新田均(皇学館大学教授)、藤尾秀昭(致知出版社社長)、前野徹(アジア経済人懇話会会長)、松浦光修(皇学館大学教授)、松平康隆(日本バレーボール協会名誉会長)、三浦朱門(元文化庁長官)、三宅久之(政治評論家)、三好祐司(全日本教職員連盟委員長)、向山洋一(ＴＯＳＳ代表)、村上和雄(筑波大学名誉教授)、村田良平(元駐米大使)、森田健作(俳優)、山口宗之(九州大学名誉教授)、山田英雄(元警察庁長官)、吉田利幸(大阪府議会議員)、米長邦雄(永世棋聖)、和田秀樹(精神科医)、渡辺利夫(拓殖大学学長)

※ 資料出所: http://kyoikusaisei.blog73.fc2.com/（検索日: 2006年7月20日）

そして現在、「つくる会」の理事会の顔ぶれは表II-6のようである。これからこの顔ぶれが2009年の採択戦に向けてどのように「つくる会」を導いていくか、注目するところである。

表II-6. 理事陣の変化(2006年4月から2009年4月)

2006年7月2日		肩書き	2009年4月13日	
職業	氏名		氏名	職業
評論家　元参議院議員	小林正	会長	藤岡信勝	拓殖大学教授
弁護士	高池勝彦	副会長	高池勝彦	弁護士
大正大学教授	福地惇		福地惇	大正大学教授
拓殖大学教授	藤岡信勝	理事	杉原誠四郎	武蔵野大学元教授
評論家	遠藤浩一		—	—
拓殖大学客員教授	石井昌浩		—	—
歴史教科書研究家	上杉千年		上杉千年	歴史教科書研究家
狭山ヶ丘高等学校校長	小川義男		—	—
浦和大学名譽教授	九里幾久雄		九里幾久雄	浦和大学名譽教授
ジャーナリスト	桜井裕子		—	—
武蔵野大学教授	杉原誠四郎		杉原誠四郎	武蔵野大学教授
日本文化総合研究所代表	高森明勅		高森明勅	日本文化総合研究所代表
コンサルタント会社社長	濱野晃吉		濱野晃吉	コンサルタント会社社長
明治大学教授	福田逸		—	—
神戸大学助教授	吉永潤		吉永潤	神戸大学助教授
—	—		小山常実	大月短期大学教授
—	—		渡辺眞	—
東京大学名誉教授	芳賀徹	顧問	—	—
ノンフィクション作家	工藤美代子		工藤美代子	ノンフィクション作家
杏林大学客員教授	田久保忠衛		—	—
拓殖大学日本文化研究所所長	井尻千男		井尻千男	拓殖大学日本文化研究所所長
—	—		加瀬英明	拓殖大学客員教授
専任	鈴木尚之	事務局長	鈴木尚之	専任

※ 資料出所: 2006年7月2日の理事会名簿は「つくる会」第9回総会議案書より; 2009年4月13日の理事会名簿は「つくる会」のホームページhttp://www.tsukurukai.com/02_about_us/07_supp_06.html(検索日: 2009年4月13日)より

III. おわりに：東アジア国際関係に与える含意を中心に

「つくる会」は元来、多様なバックグラウンドをもっているグループと個人が集まって、結成された。にもかかわらず、結成初期から2001年の採択戦までは特別な葛藤を見せていなかったばかりか、単一な行為体のような印象を日本国内外に与えていた。実際、2001年の採択戦までには主な葛藤が観察されない。ただ、大月のように脱会しても、路線の差から脱会に至ったのではなく、そして暴露というのもしたくないと述べていることから見て取れるように、「つくる会」に参加していた人たちはこの運動を大切にして教科書づくりと採択という目標のため前進した。

しかし、2001年の採択戦での惨敗は「つくる会」に潜在していた葛藤の要素を刺激、特に「反米」という対立軸が浮かび上がって「つくる会」は内紛に陥るに至った。「反米」という軸をもっている勢力が消えてしまったことは、以降、「つくる会」の日本政界への接近に歯止めをかけるグループがなくなってしまったことを意味した。内紛を経験したあと、「つくる会」は組織を再整備し、もう一度、この間蓄積してきた運動の成果と有利な環境に基づいて運動を懸命に展開したが、2005年にも1%にも満たない採択率で苦杯をなめた。それはまた、様々な背景をもっている「つくる会」のグループ間の多様な利害関係を刺激、ついに分裂をもたらすに至った。

このような「つくる会」内紛と分裂の過程を、本稿はまたハーシュマンの枠組みを用いて探ってみた。理事会の個々のメンバーは「つくる会」の組織の危機に直面し、五つの選択肢――「脱会」、「発言」、「忠誠」、これに加えて「発言後離脱」と「離脱後沈黙」――を活用した。彼らがどのような選択肢をとるかによって、「つくる会」のダイナミックスが観察された。このダイナミックスで確認できたのは、「つくる会」が外部の視線から見えるように決して単一な行為体ではないことである。「つくる会」という組織は多様な路線をもっているグループや個人が参与しており、各グループの力学によって、「つくる会」という組織の性格と運動方針が決められる組織である。

もう一つ、ハーシュマンの枠組みの適用を通して見つけた「つくる会」の特徴は、「沈黙(Loyalty)」という選択肢の活用である。本稿の冒頭にも述べたように、ハーシュマンの枠組みのなか、「忠誠」という選択肢は離脱や発言の選択肢とくっついて離脱や発言を加速化、あるいは鈍化する媒介体として働くなど、曖昧な側面が著しかった。ところが、「つくる会」の分析でも検討したように、利害以外に思想や信念に基づく、例えば「右翼団体」を分析する際、より研究的価値があるのではないかと考えられる。

歴史問題をめぐり、「つくる会」を中心にする日本全体の保守化は、多くのメディアで「右傾化」として表現され、とくに日本と不幸な歴史を共有している東アジア国家から批判を受けて外交問題になっている。「つくる会」の教科書の検定と採択が行われた2001年と2005年、特に韓国と中国の政府は日本大使を召還して抗議をしたり、韓国と中国のなかでは市民団体が日本の政府と「つくる会」に対して糾弾をしたり、強烈な反日デモが起こったりしたこともあった。このように、外交問題化しているが、日本政府も「つくる会」を中心としての日本内保守勢力の動きと反発に対しては手放し状態といえ、日本と近隣諸国との関係は冷えきっている。

しかし、本稿で探ったように、「つくる会」は、2001年の採択戦以後、内紛で組織の結束力(solidarity)上の問題を表出させ、2005年の採択戦以後には分裂の過程を歩んだ。つまり、東ア

ジアで一つの問題群として挙げられている「つくる会」が、国家間の関係を損なうほどの運動を導いている強力な単一の組織もしくは勢力によっているとみなすことに慎重であるべきことを確認した。さらに本稿は「つくる会」という組織が常に堅固であるとみる反対派が、現状を正しく認識して「つくる会」から派生している問題群に対してより正確な理解と対策に取り組むのに有意味であると思われる。より正確な認識と理解を踏まえていくことで、日本と東アジアは調和の接線をみつけられるだろうと期待する。

※本稿の改善のため、貴重なコメントを下さった匿名のレフェリーに感謝の意を表したい。

註

1. 「つくる会」は文科省の検定後、学校現場で採択する過程を「採択戦」としばしば呼ぶ。彼らの運動を始めたとき出した『歴史教科書との15年戦争』という本をみても、彼らが教科書問題にかかわる活動を「戦争」と認識していることがわかる。
2. これは、彼らの声明と記者会見の発言などから裏付けられる。「歴史教育の問題は、先の大戦に敗れてから半世紀にわたり繰り返し論じられてきたにも関わらず、その歪みが正されるどころか、近年ますます歪曲混迷の度を深めている。…例えば、証拠不十分のまま「従軍慰安婦」強制連行説をいっせいに採用したことも、こうした安易な自己悪逆史観のたどりついた一つの帰結であろう」〈「つくる会」の創設にあたっての声明〉http://www.tsukurukai.com/02_about_us/03_move.html(2009/10/15)、「『従軍慰安婦』が登場するなど、教科書の近現代史記述の偏りが指摘される中、次代の日本人を育てるのにふさわしい歴史教科書づくりを目指す」という発言。産経新聞(1996年12月3日)
3. 「つくる会」の趣旨書。http://www.tsukurukai.com/02_about_us/01_opinion.html (2009/10/15)
4. 「つくる会」の影響力、ネットワークに関する研究は、具裕珍[2006]参照。
5. 「『つくる会』教科書をほぼゼロ採択に追い込んだ結果をもたらした決定的な要因は『地域』、つまり地域の草の根の活動」である(俵[2005:5])。
6. ハーシュマンの枠組みを用いるには、因果関係を説明する使い方と記述(description)のツールとしての使い方とに区別できるだろうが、本稿は記述的なツール(descriptive tool)として用いることにする。なぜならば、本稿はどの条件下で個々の構成員がどの選択肢を取っていくかなどの因果関係の分析を目指すのではなく、上述したように「つくる会」の内部のダイナミックスを浮き彫りにするため、彼らの行動パターンはいかなるものなのかを見るため用いるからである。
7. ハーシュマンのExit, Voice, Loyaltyの枠組みの提示以来、数多くの研究者がこの選択肢の組み合わせを試みてきた。④「発言後離脱(Voice→Exit)」に関してハーシュマンもはっきり区分していないが、ハーシュマンのフレームワークを通じて国会議員を分析したKato[1998]は、ハーシュマンが最初提示したように、「離脱」と「発言」が別々に取られる選択肢ではなく、つまり、「離脱」と「発言」の関係がトレードオフではなく、一人が取れる選択肢として提示した。私もこれに加えて「つくる会」の理事会の内紛と分裂を観察するさい、「離脱後忠誠(Exit→Loyalty)」という選択肢があることを見つけるようになった。
8. 「公民教科書」の場合もほぼ同じで、採択率は2001年0.055%、2005年0.2%である。
9. 産経新聞(1996年12月3日)
10. 「つくる会」は1998年1月6日、「つくる会」が作成する教科書は「歴史」と「公民」の二種類、それぞれの教師

用指導書と自習ノートのほか、検定を目的としない歴史教科書のパイロット版「国民の歴史」（仮題）もあわせ、計七点の出版を目指して、発売は扶桑社、編集作業は産経新聞ということを発表した。産経新聞(1998年1月7日)

11. 「俵の解説(歴史修正主義者の動向)」http://www.linkclub.or.jp/~teppei-y/tawara%20HP/kaisetu.html(検索日: 2006年7月5日)、俵氏は、「『つくる会』は日本会議と提携を強めて」いて「高橋の副会長就任は、いよいよ本命が実権を握ったという印象が強い」と述べている。
12. 「教科書ネット」は家永教科書裁判支援会の精神を引継ぎ、1998年6月13日に結成された。教科書ネット21は、すでに子どもと教科書を取り巻くさまざまな問題について発言し、行動する市民、これから考えていこうとしている人々や団体をつなぎ、ともに取り組みをすすめることを目的とするもので、「つくる会」の教科書採択阻止やさらに教育基本法と憲法改正の動きに反対しての市民運動の頂点にある団体である。詳しくはhttp://www.ne.jp/asahi/kyokasho/net21/top_f.htm(検索日: 2006年7月31日)参照。
13. 高橋氏は2004年11 月10日に「つくる会」理事会で副会長を辞任し、12月7日に「つくる会」を脱会した。そして、埼玉県の教育委員会に起用することを決め、2004年12月20日の県議会で承認された（俵[2005:43-45], 朝日新聞(2004年12月7日)）。
14. 産経新聞(2002年1月24日)
15. 2001年以来「つくる会」の会員数は減少しつつある。俵氏は「つくる会」がこうした勢力減退を、政治家や日本会議など右派組織の力を頼ってカバーしようとしていると指摘している(俵[2005:26]。
16. 俵氏は「『つくる会』教科書の採択に反対する運動は、4年（2001年）前よりも確実に広まり、前進してきた。例えば、私たちが発行した10円パンフレット『選んじゃいけない「つくる会」教科書』は、28万部活用された（01年の同様なパンフは24万部）。各地の学習会なども前回より30%以上多くなり、教科書問題で活動する市民組織も前回より増え、広がり、市民・教員・保護者・労働者・弁講師・在日コリアンや中国人などによる広範な共同がつくられてきた…01年よりも2.5倍の5500会員になった子どもと教科書全国ネット21はその活動の全国的なセンターとして、情報を収集・発信して、各地の採択阻止活動をサポートしてきた」とのべている(俵[2005:22-23])。
17. 種子島氏は70歳で西尾の学友であり、さらに「原始福音キリストの幕屋」という国粋主義・天皇主義の宗教組織との関係が指摘されているようだ。また「幕屋」と「つくる会」の親密ぶりは有名で、「つくる会」の会員の4分の１が「幕屋」のメンバーだという内部情報もあると伝えられる(俵[2006:229])。
18. しかし、「つくる会」はホームページで「理事会では八木氏の副会長任命を決定しただけで、それ以外の決定は行っていない」という抗議を示した。「つくる会」が彼らのホームページで産経新聞の記事に対して、このような問題点を指摘したのははじめてで、八木氏をめぐる「つくる会」と産経新聞間の対立がみられた。http://www.tsukurukai.com/(検索日: 2006年7月5日)
19. 反対側に立っていた八木氏と種子島氏がいかに一緒の行動をするようになったのかについて詳しくは八木[2006:36-38]参照。
20. 小林正、「新しい歴史教科書を『つくる会』の会長就任にあたって」、http://www.tsukurukai.com/01_top_news/file_news/news_060621.html(検索日: 2006年7月1日)
21. 連合ニュース(2006年6月26日)。この記事によると、朝日新聞社が発売している「アエラ」という週刊雑誌で、「新『つくる会』」の発足の動きがあるということが報じられた。
22. 連合ニュース(2006年6月26日)

文献

新しい歴史教科書をつくる会 (1998)『「つくる会」という運動がある』扶桑社.

———————— (2003)『「つくる会」が問う日本のビジョン』扶桑社.

Berger, Thomas (2003) "Power and Purpose in Pacific East Asia: A Constructivist Interpretation". in G. John Ikenberry and Michael Mastanduno (eds), *International Relations Theory and the Asia-Pacific*, New York: Columbia University Press.

藤岡信勝 (1996a)『近現代史教育の改革』明治図書出版.

———(1996b)『汚辱の近現代史』徳間書店.

———(2005)『教科書採択の真相』PHP 研究所.

———(2006)「『謀略』を看過するわけにはいかない」『諸君!』6 月号: 20-210.

한상일(韓相一)(2000)『일본지식인과 한국(日本知識人と韓国)』, 오름.

——— (2006)「일본형 시스템과 글러벌화: 내셔널리즘의 저항과 적응- 글러벌화와 <새로운 역사교과서를 만드는 모임>(日本型のシステムとグローバル化:ナショナリズムの抵抗と適応-グローバル化と『新しい歴史教科書をつくる会』),국민대학교일본학연구소 학진 2 기 워크숍 발표논문 <国民大学校日本学研究所学振二期ワークショップ>発表論文.

Hasegawa, Tsuyoshi and Togo, Katuhiko (eds.) (2008) *East Asia's Haunted Present: Historical Memories and the Resurgence of Nationalism*, Praeger Security International.

Hirschman, Albert O. (1970) *Exit, Voice , and Loyalty: Responses to Decline in Firms, Organizations, and States*, Harvard University Press.

———————— (1993) "Exit, Voice, and the Fate of the German Democratic Republic: An Essay in Conceptual History," *World Politics*, 45: 173-202.

정진성(鄭鎭星) (2001)『현대일본의 사회운동론(現代日本の社会運動論)』, 나남.

Kato, Junko (1998) "When the Party Breaks Up: Exit and Voice among Japanese Legislators," *American Political Science Review*, 92(4).

小林よしのり (2002)「『思想』は『政治』の前に沈黙せねばならぬのか」『正論』5 月号: 92-105.

具裕珍 (2006)『「新しい歴史教科書をつくる会」を通してみる歴史認識の日本政治』ソウル大学国際大学院修士学位論文.

이원덕(李元德) (2005)「한일 과거사 갈등의 구조와 해법 모색(韓日の過去史葛藤の構造と解法の模索)」,『세계지역연구논총(世界地域研究論叢)』, 23(2).

이웅현(李雄賢) (2006)「새로운 역사교과서를 만드는 모임과 한-일관계(「新しい歴史教科書をつくる会」と韓日関係)」, 서진영・이신화・김장수 편.『21 세기 동북아시아의 정치지형과 전략(21 世紀東北アジアの政治地形と戦略)』, 오름.

Lind, Jennifer (2008) *Sorry States: Apologies in International Politics*, Cornell University Press.

村井淳志 (1997)「自由主義史観研究会の教師たち」『世界』4 月号.

中西新太郎 (1998)「『小林よしのり』というメディア」『世界』12 月号: 106-117.

西尾幹二 (2002)「臆病者の『思想』を排す:小林よしのりを論ず」『正論』6 月号: 320-334.

———(2006)「八木君には『戦う保守』の気概がない」『諸君!』6 月号: 196-205.

西尾幹二他 (1997)『歴史教科書との 15 年戦争』PHP 研究所.

西岡政秀 (2006)「『つくる会』-内紛の一部始終」『諸君!』5 月号: 170-177.

小熊英二 (1998)「『左』を忌避するポピュリズム」『世界』12 月号: 94-111.

小熊英二・上野陽子 (2003)『〈癒し〉のナショナリズム』慶應義塾大学出版会.

大月隆寛 (2000)『あたしの民主主義』毎日新聞社.

小沢一郎 (1993)『日本改造計画』講談社.

박철희(朴喆熙)(2006a)「일본 정계에서의 신보수주의 세력의 성장과 한국에의 함의(日本政界上に新保守主義勢力の成長と韓国への含意)」, 김영작・전진호 엮음,『글로벌화 시대의 일본- 한국에의 함의(グローバル化時代の日本:韓国への含意)』, 한울.

——— (2006b)「일본의 대외정책 결정패턴의 변화(日本の対外政策決定パタンの変化)」, 이면우 엮음,『일본의 국가 재정립(日本の国家再定立)』, 한울.

Richter, Steffi (2004) "Japan: The history textbook controversy as an indicator of national self-reflection," Gesine Foljanty-Jost (ed.) *Japan in the 1990s: Crisis as an Impetus for Change*, Münster.

俵義文 (1997)『教科書攻撃の深層』学習の友社.

——— (2001)『あぶない教科書』学習の友社.

——— (2005a)『あぶない教科書 NO!』花伝社.

——— (2005b)「『つくる会』教科書を撃退した市民の力」『世界』10 月号.

——— (2006)「『新しい歴史教科書をつくる会』内部抗争の深層」『論座』6 月号: 228-235.

八木秀次 (2006)「さては西尾幹二名誉会長の『文化大革命』だったか」『諸君!』7 月号: 28-38.

尹秀敬 (2006)『旧社会党勢力の移行過程を通してみる日本革新政治勢力の変化』ソウル大学国際大学院修士学位論文.

吉田裕 (1997)「閉塞するナショナリズム」『世界』4 月号.

「新しい歴史教科書をつくる会」 http://www.tsukurukai.com/

「子どもと教科書全国ネット 21」 http://www.ne.jp/asahi/kyokasho/net21/top_f.htm

「俵のホームページ」 http://www.ne.jp/asahi/tawara/goma/

「西尾幹二インターネット日録」 http://www.nishiokanji.jp/blog/

「藤岡信勝ネット発信局:So-net blog」 http://fujioka-nobukatsu.blog.so-net.ne.jp/

産経新聞

朝日新聞

連合ニュース

受稿2009年7月14日／掲載決定2009年9月11日